

はじめに

理論と実践をつなぐ ISLA 研究入門

本書『あたらしい第二言語習得論——英語指導の思い込みを変える』は、今までにない全く新しい第二言語習得の教科書を目指して執筆しました。

第二言語習得 (Second Language Acquisition: SLA) 研究は、1960 年代に欧米で生まれた比較的新しい学問です。さらに、指導場面における第二言語習得、すなわち Instructed SLA (ISLA) 研究が近年では注目を集め、「外国語はどのように指導・学習したら良いのか」という大きな問いに実証的にアプローチし、様々なコンテキストにおける外国語教育に有益な知見を蓄積しています。近年では、日本でも、多くの SLA に関する教科書が出版され、外国語教育分野で広く認知されるようになってきました。

私自身、東京学芸大学で修士まで英語教育研究について学び、その後、博士号 (PhD) 取得のため留学した米国メリーランド大学で SLA 研究を本格的に行うようになりました。帰国後、約 10 年間 SLA 研究を続けると同時に、日本の様々な英語教育の実践を見る機会にも恵まれました。当初は欧米発祥の ISLA 研究と日本の中学校や高校の英語授業は別物として捉えていましたが、日本全国での新しい英語教育の取り組みを目の当たりにして、ISLA 研究との関連が徐々に見えてきました。そして、今では ISLA 研究と教育実践を結びつけることが両者にとって重要だと考えるようになりました。この経験から、ISLA 研究と日本の英語教育実践の架け橋となる入門書の必要性を強く感じ、本書の執筆に至ったのです。

こうした ISLA 研究と外国語教育が交わる新しい潮流の先を目指し、本書は、ISLA 研究の入門書として 3 つの新しさを打ち出しています。

① ISLA 研究の基礎から最前線まで日本語で学べる

本書は、ISLA 研究の基礎から最新動向までを幅広くカバーしています。ISLA 研究の新しい成果は論文や専門書で発表されることが多く、外国語教育の現場に伝わりにくいのが現状です。そのため、ISLA 研究のエッセンスの紹介に加えて、最新の研究成果も取り入れ、新たな研究展開についても理解を深

めることができるよう努めました。そして、文法・語彙・発音・語用論の指導、インタラクション・訂正フィードバック、言語適性・非認知能力・動機づけ・感情・エンゲージメント、さらには外国語教授法・指導法など、多岐にわたるテーマについて、基礎的な知識から最先端の研究成果まで知ることができるように丁寧に解説しました。

②「ISLA 研究」×「英語教育」の2つの視点から学べる

本書のもう一つの強みは、「英語教育から見た ISLA 研究」と「ISLA 研究から見た英語教育」の双方向から学べることです。日本の英語教育に携わる読者を想定し、英語教育の観点から ISLA 研究の知見を分かりやすく解説しました。同時に、ISLA 研究の観点から日本の英語教育を捉えます。この2つの視点を行き来することで、ISLA 研究自体の理解が深まり、理論と実践を結びつけやすくなります。

日本で英語を教える人へ向けて書いた和書ならではの強みを活かし、日本の英語教育の現場に直結する ISLA 研究も積極的に取り上げています。ISLA 研究は世界中で行われていますが、日本の英語教育の文脈で行われた研究も数多く紹介することで、読者の教育実践に役立つ知見が得られるよう工夫しました。

③ ISLA 理論と実践を結びつけながらアクティブに学べる

大学での実際の講義をベースに執筆された本書には、講義・ゼミで使いやすいように、アクティブに ISLA 研究を学ぶための工夫が随所に施されています。序章と終章では、読者の英語指導・学習観を確認し、振り返るためのアクティビティを用意しました。また、各章でも読者が理論と実践を結びつけられるような仕掛けが取り入れられています。これらの工夫については、「本書の使い方」で詳しく説明します。このように、本書は ISLA 研究の紹介にとどまらず、実践的な学びに繋がるような構成を心がけました。

英語を教える人にとって、ISLA 研究を学ぶメリットは、その知見を実際の教育現場で活かすことにあります。本書を通じて、読者の皆さんが ISLA 研究という新しい学問分野への興味を持ち、日々の英語授業の改善のヒントとして本書を役立てていただけることを願っています。

本書の使い方

対象者

本書は、次のように英語教育と ISLA 研究に携わるすべての人に向けて書かれています。

- ◇ ISLA 研究を学びたい大学生・大学院生
- ◇ 英語教師を目指す人
- ◇ ISLA 研究の知見を英語授業に活かしたい人
- ◇ 英語教育研究者および ISLA 研究者

活用方法

- ◇ 大学や大学院での教科書
 - ▶ 「第二言語習得論」関連の講義やゼミナール（例：第二言語習得論）
 - ▶ 文部科学省の「外国語（英語）コア・カリキュラム」に沿った、英語教員養成課程の授業（例：英語教育学、英語科教育法）
- ◇ 英語教師の自己学習教材
 - ▶ 最新の ISLA 研究や理論を学び、英語指導を改善するための自己研鑽
- ◇ 研究のためのリソース
 - ▶ ISLA 研究・英語教育研究を始めたい人のための入門書
 - ▶ 最新の ISLA 研究の動向を知りたい研究者のリファレンス
 - ▶ ISLA 研究・英語教育研究に関する研究会での課題図書

構成

本書は3部で構成されていて、ISLA 研究領域を包括的にカバーすることができます。さらに、本書には序章と終章があります。

序章 英語を教えるときの思い込みを探る： 「13の問い」で振り返る	
第1部 言語知識とスキルの指導法	第1章 文法指導 第2章 語彙指導 第3章 発音・語用論指導
第2部 学習者中心のアプローチにおける 教師の役割	第4章 インタラクションと協同学習 第5章 訂正フィードバック 第6章 認知・非認知能力の個人差 第7章 学習者心理の個人差
第3部 SLA 研究に基づく指導法と カリキュラム設計	第8章 言語形式重視の指導法 第9章 意味重視の指導法 第10章 学習開始年齢と指導法
終章 SLA 研究を通して「13の問い」を振り返る： あなたの英語指導・学習観は揺さぶられたか？	

序章：

本書を読み始める前に、英語指導・学習にまつわる「13の問い」と題した、簡単な「セルフチェック問題」に答えてもらうことで、読者の英語指導・学習観をまず確認します。

講義・ゼミでの活用例 初回授業で、これらの問いについてペアやグループで議論し、お互いの考えを共有するのがおすすめです。

終章：

本書を読み終えた後、再び「13の問い」に答え、回答と照らし合わせながら、自身の英語指導・学習観がどのように変化したかを振り返りましょう。

講義・ゼミでの活用例 最終授業では、本書を読む前と後での自身の回答を比較し、まとめと振り返りを行うと効果的です。

各章の構成

① 導入

- ・概要：各章で扱うテーマの導入
- ・Keywords：SLA 研究における重要キーワードをまとめています。
- ・Warm-up Activities：本論を読み始める前のウォームアップ活動を通して、今までの指導・学習経験を振り返り、本論に進むことができます。

講義・ゼミでの活用例 Warm-up Activities は、授業冒頭や本論を扱う中で、ペアやグループで話し合うアクティブラーニングに使えます。Keywords は SLA の重要概念ですので、理解度確認のテストにも使えます。

② 本論

- ・本文：重要な知見やポイントを太字で示し、要点を理解しやすくしています。
- ・ISLA 研究を深掘り：当該分野に関する代表的な研究を 1 つピックアップして、実際の ISLA 研究について学ぶことができます。日本の英語教育環境に関連づけやすい研究を厳選して取り上げています。
- ・コラム：読者の疑問、具体的な指導法、おススメの書籍について紹介しています。

講義・ゼミでの活用例 「ISLA 研究を深掘り」で取り上げた論文や書籍を実際に読んで、さらに議論を深めることができます。

③ まとめと発展

- ・教師として知っておくべきこと：各章の SLA 研究の知見をまとめています。
- ・Discussion Questions：各章のテーマの理解を深めたり、議論しやすい質問を 3、4 問挙げています。
- ・もっと詳しく学びたい人へ：各章のテーマについて、より専門的な知識を身につけたい人に向けて、おススメの書籍や実践に役立つリソースを紹介しています。

講義・ゼミでの活用例 Discussion Questions の一部を宿題にして、次の授業の冒頭で復習を兼ねて、議論することができます。

※本書では入門書として読みやすさを考慮し、引用文献は巻末に各章ごとにまとめています。

コンパニオン・サイト

授業準備に役立つ、(1) ハンドアウト、(2) 図・表を含むスライド、(3) 補章を載せたコンパニオン・サイトを用意しています。

コンパニオン・サイトのアドレス：

https://www.kenkyusha.co.jp/lp/instructed_sla/

英語を教えるときの 思い込みを探る

「13の問い」で振り返る

本書を読み始める皆さんへ

ISLA 研究を学ぶ最大の意義は、自身の英語指導経験を振り返り、教育観・学習観を揺さぶり、考え直し、確かめることにあります。本書は、日本の英語教育の視点から、ISLA 研究の知見を紹介しています。しかし、英語教育の環境は地域や校種によって大きく異なります。だからこそ、自身の教えている授業や、教わった経験と関連づけながら、本書を読み進め、省察して欲しいのです。

ISLA 研究の理論と実践経験を結びつけ、一人ひとりの「実践知」を作り上げるための一助として、英語指導・学習に対する価値観や思い込みを問うセルフチェック問題を用意しました。ぜひ、本書を読み始める前に、これらの問いに答えてみてください。

Warm-up Activities

「英語を教えるときの「思い込み」を振り返るための13の質問」に答えてみましょう。そして、以下の3つの点について考えましょう。

1. 「D. 強く同意する」「C. 同意する」を選んだ項目はどれですか。なぜそのような自分が考えるようになったか、自分の英語指導・学習経験を振り返ってみましょう。
2. 「A. 全く同意しない」「B. 同意しない」を選んだ項目についても、自身の経験と結びつけて、なぜそう考えるようになったか振り返ってみましょう。
3. 「13の問い」の中で、もっと知りたい、さらに深く学びたいと思った項目はどれですか。それはなぜか説明してみましょう。

英語を教えるときの「思い込み」を振り返るための13の問い

次の項目に対して、どれくらい同意するか○をつけてください。

A 全く同意しない B 同意しない C 同意する D 強く同意する

1. 文法は分かりやすく教えることで身につく。	A B C D
2. 単語リストによる暗記学習は効率的である。	A B C D
3. 英語の発音は通じればいい。	A B C D
4. 相手にどう伝えるかを学ぶことは、語彙・文法学習よりも優先度が低い。	A B C D
5. ペア・グループ学習では、間違っただ英語が身につけてしまう。	A B C D
6. 生徒が話すときは間違いを訂正すべきだ。	A B C D
7. 生徒の英作文の間違いはすべて訂正すべきだ。	A B C D
8. 外国語学習の才能がない人は、英語学習に成功できない。	A B C D
9. 生徒をやる気にさせる教え方は存在する。	A B C D
10. 繰り返し練習はコミュニケーション能力の育成に役立たない。	A B C D
11. 正確さよりもまず使ってみることを重視すべきだ。	A B C D
12. 英語学習の開始は早いほど成功できる。	A B C D
13. 優れた英語教師になるために、SLA 研究の成果が役立つ。	A B C D

📖 本書を読み終えたら、終章でもう一度、「英語を教えるときの「思い込み」を振り返るための13の問い」に答えて、どのような変化があったか考えてみましょう (p.205)。



文法指導

学びのプロセスからどう教えるかを考える

本章では、SLA 研究によって明らかにされた文法習得のプロセスについて学びます。どう文法が身につくかを理解し、文法指導の効果について考えます。そして、インプット・アウトプットがどう文法習得を促進するか検討し、コミュニケーション能力の育成のための文法指導について議論します。

Keywords

中間言語、辞書 + 文法モデル、用法基盤モデル、インプット仮説、アウトプット仮説、気づき、自動化、明示的・暗示的知識、明示的・暗示的文法指導、形式・意味・機能、統合型・独立型文法指導

Warm-up Activities

1. 英文法のルールについて知っていても使えなかった経験はありますか。
2. 文法解説は必要だと思いますか。
3. インプットとアウトプットのどちらが重要だと思いますか。

1. 文法を身につけるとはどのようなことか？

SLA 研究の知見を元に、文法習得のプロセスから、文法を効果的に教えるためのヒントを探りましょう。まず、「学習者のエラー」と「文法知識」の捉え方がどのように変化してきたかを概観します。

1.1 文法の間違いは避けるべきか？

英語学習者が文法の間違いを犯したとき、あなたはどのように対応しますか。「間違いは直ちに正すべき」と考える教師もいれば、「間違いは学習の過程で自然に起こるもの」と捉える教師もいるでしょう。では、文法の間違いに対する考え方は、SLA 研究の中でどのように変化してきたのでしょうか。

1960年代後半まで、外国語学習とは聞いたものを**模倣 (imitation)**・**反復練習**して、正しい行動を形成するという**行動主義 (behaviorism)**に基づいた

考えが主流でした。そのため、誤りは排除すべきもので、どうすれば誤りを事前に防げるかということが重要視されていました。この考えのもと、効果的な文法学習とは、母語と外国語の違いによって、その難易度を予測して、難しい文法項目を徹底的に洗い出すことに注力する**対照分析仮説 (contrastive analysis hypothesis)** が注目を集めていました。

しかし、実際に学習者の文法の誤りを調べていくと、聞いたものの単なる模倣でもなければ、すべてが母語との違いから説明できるわけではないことが分かります。例えば、come の過去形を comed としたり、be 動詞を過剰に使って *The most wonderful thing was happened. とする文法エラーは、日本語母語話者だけではなく他言語の母語話者の英語学習者にも共通して見られます。そのため、学習者の誤りを分析する**誤用分析 (error analysis)** を行い、文法習得のプロセスを調べる必要性が認識され始めました。

誤用分析を契機に、**誤りを犯すことは文法習得プロセスの重要な一部だと捉え直されるようになり**ました¹。学習者は、自分の知っている文法規則を試して、間違えることでより正しい使い方を学ぶことができると考えたのです。

実際、教えた文法規則がすぐに使えるようになることは稀です。それは、文法習得が、学習者が誤りを犯す中で、学習者が既に持っている知識と照らし合わせながら主体的に学んでいくプロセスだからです。学習者が独自に頭の中にしていく文法知識を**中間言語 (interlanguage)** と呼びます²。中間言語とは、母語から第二言語 (目標言語) までの「間」に位置する、学習者独自の言語知識の体系を指し、ダイナミックに発達していくものと考えられています。

中間言語の発達は U 字曲線を描くことがあります (図 1.1)。例えば、不規則動詞の過去形の習得には、3つのステージがあると仮定されます³。

第1段階では、丸暗記に近い形で正しい表現が使えます (例: came, put)。しかし、その後自分の知っている表現を組み合わせた、自分なりの規則分析をすることで、創造的にことばを使うよう

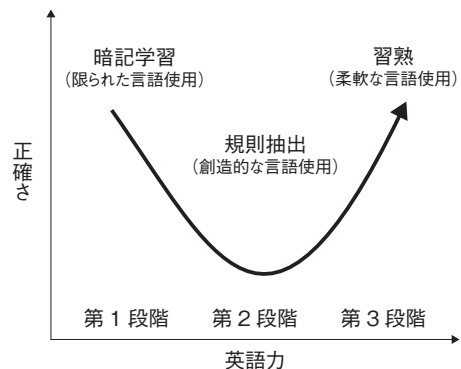


図 1.1 U 字発達プロセスの例

ISLA 研究を深掘り

明示的文法指導の効果は持続するか？

Tode, T.(2007). Durability problems with explicit instruction in an EFL context: The learning of the English copula *be* before and after the introduction of the auxiliary *be*. *Language Teaching Research*, 11, 11-30.

文法指導の効果検証の研究は、学習者の文法習得プロセスについて興味深い知見を示してくれます。ここでは、日本の中学校で英語を教えていた戸出朋子によって行われた実験を紹介します。本研究では、中学1年生を対象として、「be動詞と一般動詞の区別」に関して明示的に指導するクラス、暗示的に指導するクラス、何も指導を与えない（統制）クラスの3種類のグループを比べました。

中1の12月に行われた50分授業では、明示的指導クラスではbe動詞と一般動詞の違いについての文法解説と例文を提示した後に和文英訳練習に取り組み、暗示的指導クラスでは文法説明をせずに、例文を発音して個人・ペア学習で覚えました。そして、明示的指導の効果がどこまで持続するかを調べるため、明示的指導の直後から中学2年生の6月まで計5回の事後テストを実施しました。事後テストの一部として行われた一般動詞を使った和文英訳テストの結果を図1.3に示します。

12月の指導直後から1月までは、明示的指導クラスの成績が高かった

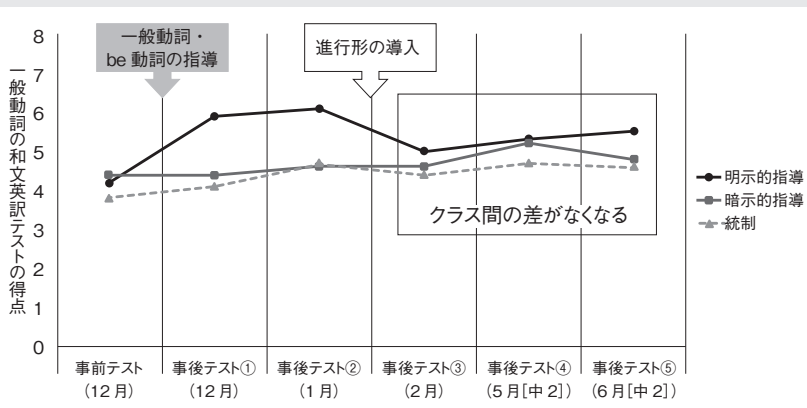


図 1.3 事前テストから事後テストへの文法テスト得点の変化

最後に、このような第二言語習得の認知プロセスにおいて、明示的指導がどう役立つか再確認してみましょう。まず、明示的指導から得られた明示的知識は、気づきやインテイクという認知プロセスにも働きかけて、暗示的知識の発達を間接的に促進することができます（弱いインターフェース）。さらに、明示的知識は、アウトプットによって自動化され、それが最終的に暗示的知識の習得に繋がり、正確かつ流暢に英語を使うことに貢献します（強いインターフェース）。このように、インプットからアウトプットまでの学習プロセス間で、明示的知識にタイミングよくアクセスさせることで、正確に文法を使えたり、知識のギャップに気づいたり、仮説検証して、使える文法知識が身につけてゆくのです（具体的な実践例については、**♀コラム** 参照）。



コラム インプットとアウトプットを繋ぐ文法指導とは？

インプットからアウトプットまでの認知プロセスを活かし、文法指導を効果的に行うには、**要約法 (summarizing)** や**文章復元法 (text reconstruction)** が有効です。

要約法は、学習者が英文を読んだ後、キーワードを基にしたコンセプトマップを作成しながら要約を書いたり、話したりする活動です。ペアの生徒に向けて要約を話したあと、インプット本文に戻りうまく表現できなかった箇所を確認したり、本文に含まれている表現を使いながら、感想や考えを付け加えることもできます。

文章復元法では、インプット（本文）の内容理解と音読を中心とした練習後に、内容を思い出す手がかりとなるキーワード・挿絵・写真を活用して、内容について話したり、書いたりします。例えば、本文と（ほぼ）同じ表現を使い内容を復元して話したり書いたりする**再生 (リプロダクション: reproduction) 活動**と、自分の言葉に言い換える**再話 (リテリング: retelling) 活動**があります。

要約法や文章復元法は、伝える内容を持ち、それを表現するための言語表現を使い、インプットの文章と自分のアウトプットを比較することで、文法習得を促進することが示されています。また、正確に内容を伝えるために必要な文法事項については、先に教えたり、アウトプット後に間違いに気づかせることで、文法知識を活性化できます。これらの実践方法について、より詳しく知りたい読者には、次の書籍がおすすめです。

📖 村野井仁 (2006). 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店.

教師として知っておくべきこと

- 学習者の文法エラーは、主体的で創造的な学びのプロセスの一部であり、文法指導の参考になる貴重な情報源。
- 理解できるインプットの中にある文法形式に気づき、暗示的知識の発達を促すことが重要。
- アウトプットすることによって、文法項目に気づいたり、自動化が起こり、コミュニケーション能力が身につく。
- 文法解説・ドリルは文法習得に役立つが、その限界点も認識し、最適なタイミングを考え、暗示的な文法指導も取り入れると良い。
- コミュニケーションの中で教える統合型文法指導と、別立てで教えて演習する独立型文法指導はそれぞれ利点と欠点がある。

Discussion Questions

1. 文法習得の発達プロセス (U字型発達など) を考慮した場合、学習者のエラーにどのように対応するのが良いか考えてみましょう。
2. 「辞書 + 文法モデル」と「用法基盤モデル」それぞれに当てはまる英語指導・学習の経験を思い出してみよう。そして、その利点と欠点について議論しましょう。
3. 統合型文法指導と独立型文法指導のそれぞれが適している条件 (学習者の特徴、文法項目の特徴、教師の特徴、指導目標) を考えてみましょう。

もっと詳しく学びたい人へ

- * 和泉伸一 (2016). 『第2言語習得と母語習得から「言葉の学び」を考える』アルク. 母語と第二言語習得における文法習得プロセスについて、様々な実証研究や具体例を通して学ぶことができる。
- * Keck, C., & Kim, Y. (2014). *Pedagogical grammar*. John Benjamins. SLA 研究と実践の両面から、文法指導・習得について多角的に学ぶことができる。
- * 田中武夫・田中知聡 (2014). 『英語教師のための文法指導デザイン』大修館書店. 明日の授業から使える文法活動が満載で、コラムでは文法指導に役立つ SLA 研究に関する情報も分かりやすく紹介している。